

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04151

研究課題名(和文) 更生保護法人に帰住した女子窃盗事犯者の実態調査

研究課題名(英文) Investigation of female theft offenders in a halfway house

研究代表者

藤野 京子 (FUJINO, Kyoko)

早稲田大学・文学学院・教授

研究者番号：10386568

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本調査は女性を標的としているため、まず女性の特徴を明らかにするため、一般人の男女を対象(n=600)に調査を行い、MillerやGilliganの主張のとおり、女性は他者関係を重視することを確認した。次に、一般女性(n=500)と更生保護法人在所中の主として窃盗事犯女性(n=36)を比較し、女性犯罪者はEPSI尺度で測定した信頼性、統合性、自立性、自主性が乏しく、AAQ- で測定した現実受容傾向が低いこと、また、Maslowの欲求段階説のより下位段階の欲求に関心がある等の結果を得た。加えて、女性犯罪者の面接結果からは、刑務所初入群の方が累入群よりも肯定的な語りが多いことも示された。

研究成果の概要(英文)：Since this study focuses females, first of all, a survey for general males and females (n=600) was conducted in order to clarify female characteristics. The result shows that females tend to value the relation between others, as Miller and Gilligan insisted. Next, a survey for general females (n=500) was compared to a survey for female offenders in a halfway house, most of them committed thefts (n=36). The result measured by EPSI shows that the female offenders' scores of trust, autonomy, initiative, and integrity are lower than general females' ones. The result measured by AAQ- also shows that female offenders tend not to accept their reality. In addition, it is observed that female offenders tend to focus on lower-level needs based on the theory of Maslow's hierarchy of needs. Furthermore, comparing females firstly incarcerated with females re-incarcerated, the former's content of episode tends to be positively than the latter's one.

研究分野：臨床心理学

キーワード：女性 犯罪者 窃盗犯 更生保護法人 面接調査

## 1. 研究開始当初の背景

犯罪・非行の認知件数・検挙件数は、この数年、減少傾向が見られるものの、一般刑法犯検挙人員中の再犯率は、増加の途をたどっている。このような状況下で、より安全な社会を構築していくためには、犯罪歴を有する人の再犯抑止を標的とした効果的な働きかけを行うことが求められている。

ところで、男性犯罪者と女性犯罪者とは、犯罪に至る直接的な要因なり事件の動機なりが異なることがしばしば観察される。女性犯罪者の場合、伝統的な性役割が影響していることがよくあり、異性関係の問題が犯罪の端緒となっていることも少なくないと言われている。また、精神疾患の罹患率、虐待等被害経験を有する比率も、男性犯罪者に比べて女性犯罪者では高い。このような犯罪の至る要因が異なるのであれば、それに応じた処遇を行うことが再犯抑止につながろう。しかし、犯罪者に占める女性の比率はそれほど多くないことから、その処遇においても、男性犯罪者を念頭において開発されたものを一部修正する形で、女性犯罪者にも実施していることが少なくない。

罪種別にみると、一般刑法犯における認知件数・検挙件数は、窃盗の占める割合が最も高く、入所受刑者の罪名別構成比で見ても、男女共に窃盗が第一位を占めている(法務省法務総合研究所, 2013)。したがって、窃盗事案の減少への対策が、犯罪を減少させることにつながる。加えて、女性犯罪者においては、男性犯罪者以上に窃盗の占める割合が高くなっている。

すなわち、女性の犯罪抑止に際しての働きかけには、性差を踏まえる必要があり、その比率の高い窃盗事犯者の実態を明らかにすることが、有効な処遇を検討するに際して有用である、とまとめられる。

## 2. 研究の目的

女性犯罪者の再犯抑止の手立てを考える基礎資料を提供するために、女性による犯罪で高い比率を占める窃盗犯を中心に、受刑後、家族等に引き受けてもらえずに更生保護法人に帰住するという再犯リスクの高い者の実態を明らかにすることを目的とした。

一般女性と比較して上記女性犯罪者が、どのような心的特徴や社会観をもち、また、自身のこれまでの人生や将来観をどのようにとらえているかの差異を明らかにすることにした。加えて、彼ら自身が自らの人生をどのようにみなし、自身の事案をどのように受け止め、今後の生活をどのようにとらえているかという心証風景を明らかにすることとし、その質的差異を刑務所の初入群と累入群で比較することにした。

なお、これらの研究を行う前提となる以下の点の確認も行うこととした。

まず、今回の調査は女性を標的とするものであるが、そもそもどのような男女差が存在

するのであろうか。Miller(1986)は、女性の自己感覚は、結びつきや関係を作り、維持することをめぐって形成されるとし、すなわち、女性は他者との関係を築いたり持続させたりする中で成長していくと主張している。Gilligan(1982)も、男女の道徳性の発達には違いがあるとしている。男性には、自立性の獲得、個人主義的な権利主張の能力、抽象的基準に基づく正義の判断の能力などの発達が顕著に見られる、とする。一方、女性においては、人間関係への文脈的理解、他者への配慮などの成熟が顕著に見られると主張している。すなわち、Miller や Gilligan が女性の特徴と位置づける他者関係を重視するという側面に、一般人の男女差が存在するのかどうかを確認することにした。

つづいて、今回の女性犯罪者の自身についての心象風景を明らかにするための面接調査では、英国の男性犯罪者を対象に Maruna(2001)が用いた人生物語面接手続きの手法を用いることにした。この手法は、McAdams が開発したものであり、その面接結果のコード化において、McAdams(2001)は、人間が生きていく基本的様相として、自己統御、社会的地位と成功、達成と責任、エンパワメントを要素とする主体性(Agency)と、愛・友情、会話、世話・援助、統合を要素とする関係性(Communion)があるとしている。そこで、このコード化の適否を確認するために、これらの要素が上記の2分類となるかどうかを確認することにした。

また、上記 Maruna(2001)では、犯罪継続群と犯罪離脱群の面接内容の比較において、後者は前者に比べて「世代性(Generativity)」の内容を多く語る結果であったとする。すなわち、Maruna(2001)では、この世代性が犯罪持続を左右する鍵概念であると示しているわけだが、そもそもこの世代性の概念は、Erikson(1963)が中年期の発達課題として提示したものである。

この Erikson の世代性の概念について、McAdams & de St. Aubin (1992)は整理し、「次世代の世話と責任(若年世話)」「コミュニティや隣人への貢献(地域貢献)」「次世代のための知識や技能の伝達(情報伝達)」「永く記憶に残る貢献・遺産(遺産)」「創造性」の5側面を設定した世代性を測定する尺度 Loyola Generativity Scale (LGS)を作成している。しかし、我が国では、丸島・有光(2007)がLGSを基に、我が国の文化的背景を念頭において項目を追加して改訂版世代性尺度を作成したところ、McAdams らが挙げた因子としては「創造性」が抽出されたのみで、ほかには、「世話」、「世代継承性」の因子が抽出される結果になっている。ただし、田淵・中川・榎藤・小森(2012)では、LGSにより近く、McAdams らの5側面それぞれの概念に即した日本語訳を作成するよう試みた日本語版 Generativity 尺度を作成し、確認的因子分析を行ったところ、McAdams らが想定したの

と同様の5因子構造が支持され、ただし、そのうち3因子の信頼性係数は.62~.65と低かった、との結果となっている。上述のとおり、この世代性の概念は犯罪持続と関連するものであることから、再度、因子数及びその内容を確認することにした。

### 3. 研究の方法

#### <調査1>

【調査協力者】調査会社を通じてインターネット上で調査募集を行い、インターネット上での無記名回答を求めた。全国に在住の36~40歳、51~55歳、66~70歳の男女それぞれ100名ずつ、合計600名。

【調査内容】以下 ~ の調査を実施した。

McAdams(2001)のコード化で、主体性の要素として自己統御、社会的地位と成功、達成と責任、エンパワメント、一方、関係性の要素として愛・友情、会話、世話・援助、統合が挙げられていることから、それぞれの概念を示す質問項目を作成の上、測定した。

女性は他者関係を重視する特徴を有するとのMillerやGilliganの主張を確認するために、三枢(1998)の相互協調的自己観(人間関係の中で自己を規定していく在り方)・相互独立的自己観(関係から分離して他者から隔たる在り方)尺度について、具体的他者への言及部分を除いて使用した。

他者との関係性の詳細を明らかにするために、竹澤・小玉(2004)の対人依存欲求尺度を用いた。同尺度は、情緒的依存(他者との情緒的で親密な関係を通して自らの安定を得たいとするもの)と、道具的依存(自身の課題や問題解決のために、他者からの具体的な援助を求めようとする)を測定するものである。加えて、人に依存するのとは逆に、人からの依存を自らが受け入れることも実際にはありうると想定されることから、後者を含めた項目を用意し、測定した。

田淵他(2012)の参考にしながら、McAdamsの5側面を踏まえて新たに加えた項目を含む世代性に関する30項目(「次世代の世話と責任」7項目、「コミュニティや隣人への貢献」7項目、「次世代のための知識や技能の伝達」7項目、「永く記憶に残る貢献・遺産」6項目、「創造性」4項目)を測定した。

Diener, Emmons, Larsen & Griffinの人生満足度尺度(SWLS)日本語版(Uchida, Kitayama, Mesquita, Reyes, & Morling, 2008)の5項目も調査した。

#### <調査2>

【調査協力者】調査会社を通じてインターネット上で調査募集を行い、インターネット上での無記名回答を求めた。25~34歳、35~44歳、45~54歳、55~64歳、65~75歳の各層100名、計500名の一般女性。

【調査内容】以下 ~ の調査を実施した。

人生の各発達段階の到達程度を測定するため、中西・佐方(2001)のエリクソン心理社会的段階目録検査EPSIを用いた。

上記で信頼感も測定してはいるものの、自己信頼、他者心理、不信とその詳細を分析的にとらえるため、天貝(1997)の成人版信頼感尺度を用いた。

セルフ・コントロールが十分でないことが、犯罪に走らせる要因であるとする研究が多いため、杉若(1995)の習慣的な行動を新しくより望ましい行動へと変容させていく改良型セルフ・コントロールと、ストレス場面で発生する情動的・認知的反応を制御する調整型セルフ・コントロール尺度を測定した。

人は誰でも人生で幾多の苦境等に出会うのであって、その体験を回避せずに受け入れることができないことが犯罪に導く可能性があることから、同傾向を木下・山本・嶋田(2008)のAcceptance and Action Questionnaire-II(AAQ-II)で測定した。

物事への取り組み方を明らかにするために、神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野(1995)対処方略尺度TAC-24を測定した。

どの範囲の人への影響や評価を考慮して行動しているかという行動基準を明らかにするために、菅原・永房・佐々木・藤澤・薊(2006)が行動選択の参照枠として提示した各概念に相当する項目を作成の上、測定した。

調査1同様、人生満足度を測定した。

人生での最良、最悪の各経験の時期、それらに加えて、今後やりたいことの、内容及び充足される(ない)欲求の種類を測定した。

#### <調査3>

【調査協力者】更生保護法人に在所中の成人女性(窃盗事犯者が中心)で調査協力に同意を得られた36名(刑務所の初入群19名、累入群17名、平均年齢48.3歳)。

【調査手法】各調査協力者に質問紙調査と面接調査を実施した。

(1)面接調査 McAdams(2008)の人生物語面接手続きを邦訳し、それに従って面接調査を行った。具体的面接内容は、A.自身の人生物語(2~7章程度の章立てとし、それぞれの簡単な内容)、B.人生物語における大切な光景(最良の経験、最悪の経験、転機、子ども時代の良い記憶、子ども時代の悪い記憶、大人になって以降の非常に鮮明な記憶、賢く振る舞えた出来事、スピリチュアルな経験)の具体的内容、C.将来の筋書き(A.の物語の次章、夢・希望・計画、人生でしたいことや既に始めていること)、D.人生で出遭った難題(最大の難題、自他の健康問題、喪失体験、最大の失敗・後悔)、E.信条(宗教観、政治観、宗教観や政治観がどのように変遷してきたか、人生で最も大切にしている価値観)、F.人生における主題、であった。

調査協力者は、調査実施者と、原則、事前に顔合わせを行っており、上記面接は2時間を用途に行なわれた。録音許可を得られた調査協力者の面接内容は、文字起こししたものを、McAdams(2001)、McAdams, Diamond, & de St. Aubin(1997)、McAdams & de St.

Aubin (1992)等を参考にコード化をした。  
 (2) 質問紙調査 調査2の ~ に加えて、  
 犯罪者思考の強度を明らかにするため、  
 Walters(2013)の PICTS (The Psychological  
 Inventory of Criminal Thinking Styles,  
 Ver4: 犯罪者思考心理目録) の下位尺度が測  
 定する概念を示すと考えられる項目を測定  
 した。

#### 4. 研究成果

(1) 調査1で測定した主体性と関係性につ  
 いては、因子分析の結果、2因子が抽出され、  
 それぞれの要素は想定された因子において  
 負荷量が高い結果となった。その要素で構成  
 される尺度の信頼性係数は、それぞ  
 れ.815、.863と高かった。

三枢(1998)の相互協調的自己観・相互独立  
 的自己観の尺度については、想定と違った箇  
 所の負荷量が高い項目が1項目あったことか  
 ら、その項目を除いて分析することとした。

竹澤・小玉(2004)をもとに測定した対人依  
 存欲求については、因子分析をしたところ、  
 想定された2因子双方に高い因子負荷量を示  
 す項目などがあったことから、それらを除い  
 て再度項目選定を行った。また、他者の自身  
 への依存提供についても同種の検討を行っ  
 た。その結果作成された、求一緒、求支援、  
 一緒提供、支援一緒の各尺度の信頼性係数  
 は、.856、.951、.860、.965と高かった。

世代性についての因子分析の結果は、若年  
 世話と情報伝達を合わせた世話伝達因子(7  
 項目)、地域貢献因子(5項目)、創造性と遺産  
 を合わせた創造遺産因子(6項目)の3因子が  
 抽出され、それぞれの信頼性係数  
 は、.916、.933、.904と高かった。McAdams  
 が挙げる5因子は抽出されなかったが、内容  
 的には、前世代からの継承の役割、時間軸で  
 はなく空間的な普及を図ること、後世に残る  
 ものを生み出すこと、が抽出されたと解釈で  
 き、丸島・有光(2007)と類似の結果であった。

そして、これら測定した尺度の男女差を検  
 討したところ Table 1 のとおりであった。  
 MillerやGilliganの主張が支持される結果で  
 あったとまとめられる。

Table 1 各尺度の男女比較

尺度	男性		女性		効果量 d	t値
	Mean	SD	Mean	SD		
主体性	14.09	(3.79)	14.34	(3.42)	-.07	-.84
関係性	13.62	(3.97)	14.79	(3.49)	-.31	-3.83 ***
相互協調	50.10	(11.85)	52.42	(9.96)	-.21	-2.60 **
独立的自己	44.19	(10.46)	44.29	(8.53)	-.01	-.12
求一緒	11.27	(4.35)	12.11	(4.23)	-.20	-2.41 *
求支援	35.19	(11.44)	41.08	(10.33)	-.54	-6.63 ***
一緒提供	12.65	(4.24)	13.45	(4.15)	-.19	-2.33 *
支援提供	38.34	(11.81)	41.66	(10.99)	-.29	-3.57 ***
世話伝達	24.74	(6.80)	25.82	(6.20)	-.17	-2.03 *
地域貢献	13.67	(5.09)	13.50	(5.31)	.03	0.40
創造遺産	18.36	(5.89)	17.36	(5.64)	.17	2.12 *
人生満足度	13.21	(4.61)	13.96	(4.67)	-.16	-1.98 *

\*p<.05. \*\*p<.01. \*\*\*p<.001

(2) 一般女性と女性犯罪者の2群の測定結  
 果は、Table 2 のとおりである。EPSI の下位

尺度のうち、信頼性、自律性、自主性、統合  
 性において有意差が認められる。それぞれの  
 発達課題に直面する中で、それ以前には獲得  
 したものであっても揺らぐ可能性はあるが、  
 本調査時点の状態として、一般女性に比べて  
 女性犯罪者の方が、信頼性がなく、自律性や  
 自主性に乏しく、統合性に欠いているという  
 結果である。また、成人版信頼感尺度の結果  
 からは、自己信頼、不信に有意差が認められ、  
 一般女性に比べて女性犯罪者の方が、自己を  
 信じられず、不信の念が高いことがわかる。  
 また、AAQ- の結果からは、一般女性に比  
 べて女性犯罪者の得点が低く、体験を回避し  
 て受け入れない傾向があることが示された。

一方、今回測定したセルフ・コントロール  
 に関しては、有意差は認められず、本人たち  
 が自認するレベルの違いがあるとはいえない  
 結果であった。また、TAC-24 で測定した  
 ストレス下の対処方略についても、有意差が  
 認められなかった。

このほか、行動基準については、一般女性  
 よりも女性犯罪者の方が社会や世間からの  
 評価や影響に頓着しないと想定していたが、  
 一般女性よりも女性犯罪者の方が、自分への  
 影響を考えないという結果が得られた。

Table 2 各尺度の一般・犯罪者の比較

尺度	一般女性		女性犯罪者		効果量 d	t値
	Mean	SD	Mean	SD		
EPSI						
信頼性	20.78	(3.94)	18.38	(4.14)	.61	3.33 ***
自律性	22.47	(4.07)	20.91	(4.19)	.38	2.11 *
自主性	21.12	(3.70)	19.38	(4.44)	.46	2.58 **
勤勉性	22.32	(4.02)	21.52	(3.41)	.20	1.09
同一性	22.65	(3.99)	21.30	(4.10)	.34	1.88
親密性	21.40	(3.86)	21.18	(4.65)	.06	.32
生殖性	19.51	(4.05)	18.36	(4.55)	.28	1.56
統合性	21.72	(3.97)	19.70	(3.92)	.51	2.84 **
合計	171.97	(25.67)	159.32	(23.12)	.49	2.64 **
成人版信頼感						
自己信頼	19.64	(4.19)	18.04	(3.65)	.38	1.98 *
他者信頼	22.75	(4.96)	22.13	(4.94)	.13	.65
不信	25.97	(5.56)	29.05	(6.41)	-.55	-2.83 **
セルフ・コントロール						
改良型	30.53	(5.37)	31.13	(4.65)	-.11	-.58
調整型	18.45	(3.75)	19.61	(3.27)	-.31	-1.60
AAQ-II	36.61	(6.87)	32.39	(6.61)	.61	3.17 **
TAC-24						
肯定的解釈	9.73	(2.30)	9.59	(2.41)	.06	.31
カタルシス	9.44	(2.46)	9.44	(2.72)	.00	.01
回避的思考	8.58	(2.10)	8.78	(2.25)	-.10	-.52
気晴らし	8.28	(2.29)	8.77	(2.86)	-.21	-1.15
計画立案	9.53	(2.17)	9.47	(2.89)	.03	.16
情報収集	8.85	(2.23)	8.84	(2.30)	.00	.01
放棄諦め	7.99	(2.14)	8.13	(2.32)	-.06	-.34
責任転嫁	6.36	(2.11)	6.08	(2.51)	.13	.71
行動基準						
自分影響	3.43	(.88)	3.00	(.96)	.49	2.55 *
身近影響	3.33	(.94)	3.28	(.96)	.05	.27
世間影響	2.86	(.90)	2.88	(1.10)	-.02	-.10
社会影響	2.62	(.92)	2.41	(1.07)	.22	1.27
自分評価	3.33	(.80)	3.13	(.98)	.25	1.39
身近評価	3.28	(.89)	3.41	(1.04)	-.14	-.78
世間評価	2.92	(.91)	3.16	(.95)	-.26	-1.41
社会評価	2.85	(.88)	2.94	(1.01)	-.09	-.52

\*p<.05. \*\*p<.01. \*\*\*p<.001

(3) 一般女性を対象に測定した人生満足度  
 について、EPSI の各尺度、成人信頼感、セ  
 ルフ・コントロール、AAQ- 、TAC-24、の  
 各尺度を投入し、重回帰分析(ステップワイ  
 ズ)を行ったところ、Table 3 に示した結果

**Table 3 人生満足度に対する単相関・重回帰分析**  
(一般女性)

	r	標準化係数β
EPSI		
信頼性	.595	.197
同一性	.570	.193
統合性	.639	.335
TAC-24		
肯定的解釈	.481	.106
情報収集	.348	.113
責任転嫁	-.047	.167
R <sup>2</sup>		.524
修正R <sup>2</sup>		.518

となった。人生満足度はEPSIの統合性と特に関連が強いことがうかがえる。加えて、EPSIの信頼性や同一性が高いほど、また、TAC-24のうち、肯定的解釈をしたり情報収集をしたりする対処方略をする者ほど、人生満足度が高いという結果が示さ

れている。

上記のとおり、一般女性と女性犯罪者を比較すると、EPSIの信頼性、統合性に有意差が認められていることから、女性犯罪者の人生満足度は低いことが推察される。

(4)一般女性と女性犯罪者の2群で、人生での最良、最悪の各経験及び今後したいことについて比較検討した。前者は質問紙により、後者は面接内容から調査実施者がコード化した。

その結果、いずれの群も最良経験の時期について20代である比率が多く、経験時期に顕著な違いは認められなかった。最悪経験については、一般女性では10代、女性犯罪者では20代の比率がそれぞれ高かったが、経験時期の分布に、有意差は認められなかった。

最良経験や最悪経験の内容は、Hayes & Smith (2005)の価値の領域を参考に分類(ただし親を加えた)した。両経験共に、一般女性はパートナーに関連することを挙げる比率が高い一方、女性犯罪者は親、子育て、親やパートナーや子以外の家族に関連することを挙げる比率が高かった。女性犯罪者は、パートナーよりも親や子への関心が強いという結果と言える。

最良体験で充足された欲求については、Maslow(1954)が提示する欲求段階に加えてMcAdamsが主張する世代性に関連した他者貢献を含めた選択肢の中から、最も当てはまるものに分類したところ、両群共に、自己実現欲求、所属欲求の順に該当者が多かったが、安全欲求を挙げる比率は、一般女性に比べて女性犯罪者が有意に高い結果となっていた。

また、最悪経験において充足できなかった欲求については、両群共に安全欲求、所属欲求の順に該当者が多かった。一般女性では上記選択肢のいずれにも非該当と回答する者が多く、その点を勘案する必要はあるものの、一般女性に比べて女性犯罪者は、安全欲求や所属欲求が満たされなかったとする比率が有意に高かった。安全欲求というより低次の欲求の充足が、一般女性に比べて女性犯罪者では課題になっているという結果である。

今後したい内容については、一般女性では非該当を除き健康を挙げる比率が最も高く、また、女性犯罪者では仕事を挙げる比率が最

も高く、両群に有意差が認められた。このほか、将来充足した欲求については、一般女性は自己実現、他者貢献の順であり、このうち他者貢献については女性犯罪者に比べて有意に高い比率であった。一方、女性犯罪者は、愛・承認欲求を挙げる比率が最も高く、一般女性に比べて有意に高い比率であった。一般女性に比べて女性犯罪者の方が、より低次元欲求充足を求めているとまとめられる。

(5)女性犯罪者のうち、刑務所の初入群と累入群で比較した。その結果、測定した尺度のうち、両群に有意差が認められたのはTAC-24のうち計画立案、行動基準のうち自分影響、PICTSのうち超楽観主義であり、初入群の方が計画性がなく、自分への影響を考えず、楽観過ぎであるとの結果であった。

また、面接内容をコード化したもので刑務所の初入群と累入群で比較した結果、関係性の要素である愛・友情を育くんだというエピソード数、及び、子ども時代に人から親切をされたエピソード数に有意差( $p<.05$ )が認められ、いずれも初入群が累入群よりも多いという結果であった。また、悪いことが良い結果を導いたという回復(redemption)の叙述のエピソード数にも有意差( $p<.01$ )が認められ、初入群が累入群よりも多く、その結果、自己成長につながったという内容のエピソード数が累入群よりも初入群に多い傾向( $p<.10$ )が認められた。加えて、語りの感情トーンとしては、「喜び」を伴う語りが初入群に多い傾向( $p<.10$ )がある一方、「恐れ・不安」を伴う語りは累入群に多い傾向( $p<.10$ )が認められた。累入群に比べて初入群の方が、肯定的語りが多かったとまとめられる。

なお、今回の語りの比較は犯罪離脱群と犯罪持続群の比較ではなく、刑務所歴であったため、世代性のエピソード数に有意な差は認められなかった。

<引用文献>

- 天貝由美子、成人期から老年期に渡る信頼感の発達：家族および友人からのサポート感の影響、教育心理学研究、45、1997、79-86
- Erikson, E. H., *Childhood and society*, 2nd ed, W. W. Norton, 1963 (仁科弥生訳、幼児期と社会、みすず書房、1980)
- Gilligan, C., *In a different voice: Psychological theory and women's development*, Harvard University Press, 1982 (岩男寿美子監訳、もうひとつの声：男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ、川島書店、1986)
- Hayes, S. C. & Smith, S., *Get out of your mind & into your life: The new acceptance & commitment therapy*, New Harbinger Publications, 2005 (武藤崇他訳、ACTをはじめ、星和書店、2010)
- 法務省法務総合研究所、平成25年版犯罪白書、2013
- 神村栄一、海老原由香、佐藤健二、戸ヶ崎泰子、坂野雄二、対処方略の三次元モデルと

新しい尺度(TAC-24)の作成、教育相談研究、33、1995、41-47  
木下奈緒子、山本哲也、嶋田洋徳、日本語版 acceptance and action questionnaire 作成の試み、日本健康心理学会第 21 回大会 発表論文集、2008、46  
Maruna, S. Making Good: How ex-convicts reform and rebuild their lives, American Psychological Association, 2001 (津富宏、河野荘子監訳、犯罪からの離脱と「人生のやり直し」:元犯罪者のナラティブから学ぶ、明石書店、2013)  
丸島令子、有光興記、世代間感心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性:妥当性の検討、心理学研究、78、2007、303-309  
Maslow, A.H., Motivation and personality, 2<sup>nd</sup> ed., Harper & Row Publishers Inc., 1954 (小口忠彦訳、人間性の心理学:モチベーションとパーソナリティ、改定新版、産能大学出版部、1987)  
McAdams, D. P., Coding autobiographical episodes for themes of agency and communion, Revised 2001, 2001 [https://www.sesp.northwestern.edu/docs/Agency\\_Communion01.pdf#search=%27Coding+autobiographical+episodes%27](https://www.sesp.northwestern.edu/docs/Agency_Communion01.pdf#search=%27Coding+autobiographical+episodes%27)  
McAdams, D.P. The life story interview, Revised 2008, 2008 <http://www.sesp.northwestern.edu/foley/instruments/interview/>  
McAdams, D. P. & de St. Aubin, E., A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts, and narrative themes in autobiography, Journal of Personality and Social Psychology, 62, 1992, 1003-1015  
McAdams, D. P., Diamond, A., & de St. Aubin, E., Stories of Commitment: The Psychosocial Construction of Generative Lives, Journal of Personality and Social Psychology, 72, 1997, 678-694  
Miller, J. B., Toward a new psychology of women, 2nd ed., Beacon Press, 1986 (河野貴代美監訳、イエス バット:フェミニズム心理学をめざして、新宿書房、1989)  
三柩奈穂、成人女性における自我同一性感覚について:相互協調的・相互独立的自己感との関連から、教育心理学研究、46(2)、1998、229-239  
中西信男、佐方哲彦、第 31 章 EPSI、上里一郎監修、心理アセスメントハンドブック(第 2 版)、西村書店 2001、365-376  
菅原健介、永房典之、佐々木淳、藤澤文、薊理津子、青少年の迷惑行為と羞恥心:公共場面における 5 つの行動基準との関連性、聖心女子大学論叢、107、2006、57-77  
杉若弘子、日常的なセルフ・コントロールの個人差評定に関する研究、心理学研究、66、1995、169-175  
田淵恵、中川威、権藤恭之、小森昌彦、高齢

者における短縮版 Generativity 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討、厚生学の指標、59(3)、2012、1-7  
竹澤みどり、小玉正博、青年期後期における依存性の適応的観点からの検討、教育心理学研究、52、2004、310-319  
Uchida, Y., Kitayama, S., Mesquita, B., Reyes, J. A. S., & Morling, B., Is perceived emotional support beneficial?: Well-being and health in independent and interdependent cultures, Personality and Social Psychology Bulletin, 34, 2008, 741-754  
Walters, G. D., The psychological inventory of criminal thinking styles (PICTS) professional manual, 2013

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 3 件)

藤野京子 犯罪者の思考スタイルを考える:Walters, G. D.の理論に触れながら -、矯正研究、1、2018、184-197  
藤野京子 女性財産犯の人生の語りの分析、早稲田大学文学研究科紀要、63、2018、21-38 [https://www.waseda.jp/flas/glas/assets/uploads/2018/03/Vol163\\_FUJINO-Kyoko\\_0021-0038.pdf](https://www.waseda.jp/flas/glas/assets/uploads/2018/03/Vol163_FUJINO-Kyoko_0021-0038.pdf)  
藤野京子 女性高齢財産犯の実情、早稲田大学文学研究科紀要、61(1)、2016、5-20 [https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=2191&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=21](https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2191&item_no=1&page_id=13&block_id=21)

[学会発表](計 4 件)

藤野京子、世代性尺度の検討:McAdams が提示した 5 側面についての検討、日本心理臨床学会第 37 回大会、2018  
藤野京子、被害を与えた際の受け止め方の変化:周囲の反応の影響についての検討、日本教育心理学会第 60 回総会、2018  
藤野京子、野上智行、東山哲也 犯罪思考スタイル尺度の検討(1)、日本犯罪心理学会第 55 回大会、2018、特別号、88-89  
藤野京子 窃盗の矯正における法と心理、法と心理、17(1)、2017、58-59

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

藤野 京子 (FUJINO, Kyoko)  
早稲田大学文学学術院・教授  
研究者番号:10386568

(4)研究協力者

小畑輝海 (OBATA, Terumi)、関根彩夏 (SEKINE, Ayaka)、仙譽晋一朗 (SENYO, Shinichiro)、湯山祥 (YUYAMA, Yuki)